

第 575 回経済学会例会報告

例会日時 2018 年 9 月 3 日

報告論題 「グローバル・インバランスの再拡大:世界金融危機の再来の予兆か？」

報告者 松林洋一

報告要旨

2000 年代に入り、世界的な対外不均衡の拡大が顕在化していた。この現象は所謂「グローバル・インバランス」(Global Imbalances)として注目を集め始めていた。2008 年 9 月にはリーマンショックに端を発する形で世界金融危機が発生し、世界経済は未曾有の経済危機を経験することになった。こうした危機の遠因としてグローバル・インバランスの存在が指摘されている。すなわち当時巨額の経常収支黒字を発生させていた中国や中近東の産油国の余剰資金が米国へと流れていた。この資金は高騰を続けていた住宅価格をさらに上昇させるとともに、低所得向けローン(特にサブプライムローン)への拡大を通じて、米国経済に過剰な融資ブームをもたらし、その帰結としてリーマンショックが発生したというものである。

世界金融危機後には、グローバル・インバランスは縮小傾向を見せ始め、危機後数年間は、世界的な貿易の停滞(great trade collapse)を招くことになる。しかし 2016 年頃から再び

不均衡は拡大し始め、現在グローバル・インバランスの再拡大が顕著となりつつある。2000 年代半ばのグローバル・インバランスが金融危機の原因であるとの主張を鑑みれば、

目下生起しつつある再拡大は、危機の再来を予兆しているのかもしれない。本報告ではデータの丁寧な観察とともに、若干の計量分析の結果も紹介しつつ、目下生じているグローバル・インバランスの今日的な意味合いを考察していくことにする。